

超然文学賞も第九回を迎えました。今回、短歌部門は38篇の応募があり、前年度からの大幅な増加となりました。嬉しいことに、複数の応募者を擁する高校もあります。そのような学校では、文芸部などの友人同士で切磋琢磨しているのでしょうか。「創作は孤独な営み」とはよく言われますが、俳句や短歌などの短詩形には、一緒に創作する仲間がいることがモチベーションとなる側面があります。この性質を「座の文芸」と呼びます。みなで歌会や句会を開き、相互批評を交わし、語彙や語法を学び合い、自作の欠点を指摘される。そこで自分独自の表現が見えてくるのです。短歌を通してよき友人を持った皆さんには、今後もその縁を大事にしてほしいと切に願います。

そしてそれと同じくらい、一人で短歌を詠み続けている人にも頑張ってもらいたい。文芸部がない、短歌に興味のある学友がない、むしろ一人でやっていきたい、などそれぞれの事情があるでしょう。そんな状況で短歌創作の喜びを知った人にお勧めしたいのが、過去の人間と対話することです。具体的には、色んな歌集や作品集を読んでみることで。同時代の人の歌集でもいいですが、ちょっと昔の短歌を読むのがいいと思います。なぜかと言うと、短歌で一番大切なのは〈他者を知る〉ことだからです。

短歌のことを「自分の中だけにある思いを、自分の中だけから生まれた言葉で表現するもの」と考えているなら、それは思い違いです。自分自身だけの考え、自分だけで生

み出した言葉、というものは無いからです。あらゆる考えや言葉は、周辺環境や人間関係から与えられたものであり、他者の影響下で私たちの人格は育てられる。ノートやパソコンの前で一人でうんうん唸って、自分だけのオリジナルの言葉をひねり出そうしても、結局出てくるのはメディアやネットから無意識的に摂取した言葉の断片だけ。そうではなくて、多様な既存の言語表現をしっかり受け止め、意識的に言葉を練磨していくことが大事です。

今回、日本各地から応募された中でも、自分だけの世界を追究した作品が多くありました。その土地ならではの風土や気候、習慣を描いた作品や、自身の家庭環境や生い立ちを素材にした作品などに、私は大きな魅力と今後の可能性を見出しました。ただ残念ながら、言葉がありきたりだったり、詩になり切れていなかったり、日本語として欠陥のある作品が多かった。今回、応募数が多い割には全体に低調、過去の受賞作に寄りすぎている、という声が複数の委員から上がりました。おそらくみんな、「傾向と対策」を頑張り過ぎている。だからこそ、自分とはまったく環境の違う作者、違う世代の短歌を読みこんで糧にすることが、大切になるのです。

というわけで、学びの第一歩には解説つきの手軽なアンソロジーがいいでしょう。

『現代短歌の鑑賞101』『現代の歌人140』（ともに新書館）

※昭和以降の代表的歌人の作品を網羅した作品集。解説は小高賢。

『桜前線開架宣言 Born after 1970 現代短歌日本代表』（左右社）

※1970年生まれ以降の歌人40名の作品を紹介。解説は山田航。

『短歌タイムカプセル』（書肆侃侃房）

※戦後（令和の歌人）115名の作品を紹介。解説は東直子・佐藤弓生・千葉聡。

『はつなつみずうみ分光器 after 2000 現代短歌クロニクル』（左右社）

※2000年以降の短歌の流れを歌集20冊を通じて解説。瀬戸夏子著。

あたりをお勧めします。これでいろんな歌人の多彩な短歌を読んで、気になった歌人を見つけたらその人の本を詳しく読んでみる、という流れもあります。自分ひとりだけでも、本を媒介として、過去の作品と心の中で歌会ができる。超然文学賞の過去受賞作や高校生短歌だけを研究材料にするのではなく、様々な現代短歌の成果を見渡すことで、次世代の作品創作に挑んでほしい。

校内にライバルがいる人、これからもかंबって互いに高め合ってください。一人で短歌の世界を歩んでいる人、他者の短歌を通して様々な時代や空間を学んでください。いかなる環境にあっても、短歌という扉は、あなたの前に開かれています。

佐藤文彦先生の総評にあるように、今回の選考は一筋縄ではいかないものでした。多方面での検討が行われた結果、最優秀賞は関谷諒太さんの「つていうのに」に決定しま

した。発想に豊かさがあり、かつ、現代への鋭い批評が潜んでいる。その一方で、文体はとても良くこなれていて、音律的な軽みがありました。

夕空と夜空のあわい ニュースから詐欺師の機械じみた肉声

冷房の当たるあたりに寝そべってここを我が家の副首都にする

逮捕された詐欺師の声の録音が流れている。たぶんエフェクトで機械的な音声になっているのかもしれない。夕方から夜へと移る曖昧な時間に、表社会から外れてしまった犯罪者の、曖昧な存在性を考える。その背後には、自分自身も曖昧な存在ではないか、という問いがある。「副首都」という素材も面白く、世間で議論される話題を、個人的生活の次元にまで縮小化して見せる。シニカルな批判精神です。

手の上で切った豆腐の一片がこぼれ耳鳴りくらいせつない

夕暮れのやたら大きな太陽が君の瞳を占めるくやしい

似た構造の二首を挙げました。繊細な抒情表現が結句で直情的表現と結びつく妙がある。この豆腐は揺れ動く自身の心の比喻とも読めます。二首目も、「君」を描きつつ、その主題は、太陽の大きさと対比される自分の小ささなのでしょう。あえて言えば、文体に慣れ過ぎて、緊張感に欠ける感がありました。今後さらに広く学んでください。

優秀賞には森田知音さんの「複数の夏」。現代短歌をよく学んでいるのでしよう、発想力と単語の処理技術は随一でした。

水筒に次の麦茶を注ぐために飲んでる麦茶 元気にしてる？

水槽は適度にせまい 冷凍のパスタがきみを生かす夕暮れ

現代の生の即物的な感情、身体感覚などが巧みに描かれていて、斬新な詩情があります。その背後に他者を思う心があり、不思議な救済の感覚がある。この「水槽」は目の前にある観賞魚の水槽であり、また、私たちが生きる世界の謂いでもあるのでしょうか。

生きてるか死んだかで変わる助数詞 折れたダリアはまだうつくしい

夏休み明けに埋まらぬ椅子がありセイタカアワダチソウの増殖

韻律の工夫もあり、外界や他者の不在を鋭敏に感受する精神が活写されている。これも時代の詩だと思いました。ただ、安定した修辞を求めた結果でしょうが、文体のワンパターンさが目立つのも事実。状況を叙述した後に一字空け、そして主体の感情を添える、という形が多い。短歌以外の様々な文芸作品、例えば近代の小説や詩などに触れて自己をシャッフルしてみてもいいかも。

優秀賞のもう一作は東野礼豊さんの「ゆるしはじめる」。情感が豊かで言葉に柔軟性がありました。相聞を匂わせるところもある一連ですが、細部の観察と描写力が物語全体のリアリティを下支えしています。センスを感じました。

ずわい蟹をデデンデデンと運んでくる 母にならないつもりの叔母が

百日紅の散りゆく歩道こんなにもベルボトム（だっけ）の似合う人とは

とにかくこの、蟹の叔母さんの存在感が秀逸です。叔母との楽しい食事風景の中に、冷静な観察眼が光っている。全体的に「他者」が生き生きと描かれた作品で、好感を持ちました。好意をよせる相手の描写も、落ち着いていて輪郭が立っています。

友達のままでいいのかままだいいのか鬼灯に実が透けている

カステラを包丁で切り包丁で渡して君はゆるしはじめる

「君」への情感のゆらめきが、精緻な描写のなかから浮かび上がっている。われと他者との関係が描かれることで、静かなドラマが流れてゆく、そんな一連でした。たしかに、やや小説的、全体的に統御されすぎていないか、という懸念はありますが、いろいろと模索してください。

佳作には石原莞奈さんの「GURUGURU」、峰凜々花さんの「骨――未来の化石――」、柳原萌々子さんの「ほどく」の三作が選ばれました。

まずは「GURUGURU」。外界をいかに受け止めるか、その精神が実に奔放自在で、ユニークな詩的発見がたくさんありました。

カキカキという擬態語をつけられたボールペン三画面目が出ない

重力が神様だった ひまわりが下向きになるように腹痛

本当はわらびのぐるぐる怖かった 木が動き出す気がしたあの日

「ニックネーム」ではなく「擬態語」と表現した点は巧みです。物や景を通して、私

の世界認識を綴ってゆく。そこに新鮮な驚きがありました。一方で、大地に縛られるような腹痛、植物への強迫観念など、自己省察の深さも特徴です。ただ、時に「幼さ」が過剰に感じられ、この一連には不相応だったかな、と思いました。立ち止まらず色々と考え続けてください。

次に「骨――未来の化石――」。特徴的な文体が眼を惹きます。ある選考委員からは「前衛俳句を思わせる詩性」との指摘がありましたが、なるほどと思います。様々な固定観念を脱臼させ、異化させてゆく試みがあります。

明滅の東京タワー脈同期 巨神の骨よ なんとかくれる

天国は場所ではなくて比較なり あれも、あ、これも せん妄の蝶

誰もゐぬ椅子にちひさき くまのピン誰かにとって世界のすべて

現実が言葉の中で乖離してゆく。景色が変容され、確実なものが無くなってゆく。そんな焦燥、不安感が刻印されているこれらの歌は、ヴァーチャルと現実が交錯する令和の感覚でしょう。ただ、一首一首で結論を出すのを急ぎ過ぎている。もう少しのたゆた、余裕が欲しかったというのも実感です。

そして「ほどく」。繊細な心の動きを、丁寧に追いかけた一連です。全体がしずけさに満ち、ほのかな死のイメージが連作的構成で巧みに演出された点で、他の作品とはかなり違う性質が感じられました。

野良猫のたまを撫でつつ人間の友人C（F（シーからえふ）を待ってる

導火線をまとめるようにつり革を両手で握る、おおきくゆれる

足跡を付けられない地に生きている 寺院にイチヨウの青がこぼれる

右一首目、作中では特異なユーモアの歌ですが、わざわざ「人間の」と説明してさらに友人を記号化する感覚に、他者への悲しみを覚えもします。「導火線」を束ねるようにつり革を掴む手には、不穏な心の衝動がある。土を踏まずに生きる私たちに、次世代の命はいかに訪れるのか。こうした疎外感が、時代の寂しさにも繋がるのでしょうか。ただ、歌一首一首が淡く、連作的構成に詩情を頼った点がありました。強い修辞を。

この他、作者のお名前はあげられませんが、家族の景を描いた「ペンだこの夜」、ゴシックな美意識に挑戦した「墓碑銘」、喪失感を諧謔的に描いた「補集合」といった作品に注目しました。みなさん今後も、短歌を愛していつてほしいと切に願います。

短歌は誰にでも作れます。つまり、大量の歴史的蓄積があり、多様な作品の履歴がある。その中から自分がピンとくる詩情を掴み取るのは、たしかに難しい。しかし、何事も目の前の一步から始まります。ぜひ、言葉の世界の多様性に、自分の身と心を預けてみてください。